

## 原田彰氏の書評に答えて

深谷昌志（東京成徳大学子ども学部教授）

著書は出版された瞬間から著者のものでなくなり、社会的な所有物となる。したがって、評価は第3者に任せ、本人は語らずというのが望ましいと考えている。

しかし、学友の原田彰氏は拙書に細かく目を通していただいただけでなく、これまで出版した筆者の他の本にも視野を広げて、長文の書評を書いてくださった。自分以上に、自分を分かっていたらいてる感じで、学友を持つ幸せを味わうことができた。原田彰氏に心からの感謝の気持ちを述べたい。

つきつめていうと、原田彰氏は事実史と思想史との関連性が重要だと指摘している。拙書にそくしていうなら、子どもの暮らしを子どもについてのコンセプトと関連させて考察すれば、子ども像を立体的に築けるという問題提起である。それと同時に、事実をとらえるにあたり、著者の視点があるはずで、その視点を明らかにする必要があるとも述べる。

この2点については、さすがに原田彰氏らしく鋭い指摘でまったくその通りだと思う。

反論の余地もない感じだが、それでは原田彰氏に失礼にあたるので、若干の弁明を行なっておきたい。

\*

子どもの声を集めたい。これが本書の執筆動機だった。長い間、子どもは教育の対象とみなされ、子ども自身の心境がきちんと明らかにされていない。昭和一桁生まれで、戦時中に子ども時代を過ごした筆者は、戦時下の学校で連帯責任という名での教師の暴力に強い反発を抱いていたし、予科練に入って国のために死ぬのが小国民の生き方という指導に疑問を感じていた。そして、敗戦。それまで忠孝を説いていた校長がデモクラシーを語るのを聞いて大人不信になった。

今になって考えると、筆者は頭でっかちの批判的な言動の多い子どもで、当時の子どもが筆者と同じ感覚でなかったとは思ふ。素朴に鬼畜米英と信じていた仲間も少なくなかった。ただ、多くの子どもは、ご真影は写真に過ぎない。奉安殿は写真のおいてある小さな倉庫だから、かっただけお辞儀しておけばよいと思っていた。いつの時代でも、子どもは真実を見抜く直感の持ち主である。

戦時中の学校については県教育史や学校史に詳しい資料が載せられている。しかし、子どもがそうした状況をどう感じていたかの記載は皆無に近い。集団疎開などについては、なんという学校の何年生の何人の子どもが何時の列車に乗ってどこまで行ったかなどの克明に記録が残されている。しかし、親と離れて疎開地に行った子どもの気持ちにふれた資料は少ない。戦後の教科書の墨塗りについても、墨を塗った箇所の記録は事細かに残されているが、塗った子どもの感想は見あたらない。

そうした状況をふまえて、子どもの声を拾った昭和史を書いてみたい。そうした気持ちから出発した研究だった。しかし、いうのは簡単だがいざ始めてみると、子どもは文字を残していないので、子どもの生活の復元は困難を極めた。

県教育史や学校史などの基本的な資料に目を通したが、子どもの教育史であって、子どもの声が伝わる資料が少ない。そこで、昭和に入ってから雑誌を通読したり、自伝を集めたりして、落穂拾いでもするように資料を集めていった。そうした資料の蒐集にきりがないので、一応の区切りをつけ、断片的な資料を組み立ててまとめたのが本書である。

生活史というには不十分な資料で、子どもの生活のほんの一部をまとめただけというのが正直な感想ある。生活史のスケッチを描くのに精一杯で、そこで力尽きたという感じでもある。

\*

原田彰氏に指摘されて気がついたことだが、資料の組み立てにあたって、今の子どもを視野に入れて、今の子どものあり方に関連する内容を活用することにした。したがって、その時期にとっては大きな問題でも現代的な意味を見出しにくい内容は捨象してある。トラホームや脚気などのデータにふれていないのがその実例になる。

また、昭和といっても、昭和初めと戦後、40年代以降では、生活の意味が異なる。大雑把に言って、テレビの普及する昭和30年代後半位までは過去の世界で、子どもの声を歴史的な資料の中から拾い出す必要がある。しかし、昭和40年代以降は生きてきた感覚を持てる現代なので、方法論的に現代の子どもを分析するのと同じような社会学的手法をとった。6章がそれまでの章と記述が異なるのは上記の事情による。

最後に生活史と思想史とを総合的に扱う視点については、非常に貴重な提案で、後続する研究者にぜひふまえて欲しいと思った。この書評が出る頃、新しい小著が出ている予定だ。これは、一つの視点にたって、実態と理念との関連を求めようとしたもので、原田彰氏の指摘に近い構想のものだと思考している。出版されてから、あらためて小著を贈呈して感想をうかがいたいと思っている。最後に、もう一度、原田彰氏の長文の書評に感謝したいと思う。